

# 經濟論叢

第134卷 第3・4号

---

## 哀 辞

故豊崎 稔名誉教授遺影および略歴

経営戦略論に関する若干の考察(3)……………降 旗 武 彦 1

シュンペーターにおける「資本主義過程」  
の探究……………八 木 紀 一 郎 31

マーケティング・チャネルにおける組織間  
管理理論：一つの修正モデル……………高 橋 秀 雄 50

公共企業体としての国鉄の出発……………張 風 波 70

インフレーションの波及過程について……………金 谷 義 弘 90

## 追 憶 文

豊崎 稔先生——人と業績——……………寺 尾 晃 洋 109

豊崎先生と奈良……………小 野 一 一 郎 114

---

昭和59年9・10月

京 都 大 学 經 濟 學 會

## 豊崎先生と奈良

小野 一 一 郎

故豊崎稔先生の学問外の業績にふれることが、編集子より私に与えられたテーマである。しかし、予めおことわりしておくが、私には、中央と地方を通じ、広範にして多岐かつ多年にわたる先生の社会的活動のすべてにふれるだけの知識も能力もない。おそらくそれを果すためには多数の関係者による一巻の追悼録を編纂する必要があるだろう。

そこで私は、先生が後半生をすごされた、私自身もそこに住んでいる奈良での先生のお仕事についてだけふれることにしたい。奈良における先生の活動にしても、残念ながら私がお手伝いできたのは、ここ数年のことで、しかもそのうち奈良市に関係する二・三にすぎず、とうてい先生の活動の全体を伝えることはできないのであるが。

先生が奈良へ居を移されたのは戦後のことである。最初は生駒に、ついで私共の学生の頃はそこからさらに片田舎であった菜畑という小さな村の農家の二階を借りて住んでおられた。先生が最終的に現在の奈良市学園南二丁目に居を構えられたのは昭和25年(1950)のことであったと記憶する。

先生が奈良への永住を決意されたのは、奈良の美しい自然と古社寺、そこに残された秀れた美術品への深い愛着と共に、奈良の風土が、大阪や京都に比べて、先生の健康の維持に適していると考えられたためと聞いている。奈良に住まわれてからも、先生の社会的活動の中心は、なおかなりの間、中央と大阪におかれていたように思われる。先生が奈良に直接関係されるようになるのは先生の京都大学停年退官(昭和40年)に近い昭和38年頃からである。そしてこのときから先生の社会的活動の力点は次第に奈良に移るのである。

いわゆる高度成長期に入って奈良とくに奈良市は全国的にトップクラスの人口急増地域となり、それにともなつて開発の波は急速な勢で進んだ。この十数年余りの間の奈良の変貌は驚くばかりで、開発の名の下に自然や文化遺産の破壊も進行した。

先生が奈良市の委嘱をうけて、奈良国際文化観光都市建設審議会の委員となられたの

は、まさに上記の危機状況下にあったこの年の6月からであるが、翌39年からは同審議会の専門調査会の委員長として、おなくなりになるまで、実質上同審議会を主催され、奈良市の開発と保存の調和のとれた町づくりを目指す施策について適切な指導と助言をなされた。

また退官後の昭和46年からは奈良市公害対策審議会の委員として、その間56年までの10年間は同審議会の会長として活躍された。今日奈良市の公害対策が全国屈指の水準にまで上げられたのは先生に負うところ大であったといわねばなるまい。また現在都市問題の最重要課題の一つに位置づけられている、就中人口急増の内陸都市である奈良市にとって必須ともいえる清掃問題についても、奈良市清掃業務審議会の委員として貢献されたのである。(このほかにもいくつかあるが省略する。)

私が先生と席を共にしたのは、このうちの二つにすぎないが、審議会での先生の基本方針は極めて明解であった。それは美しい自然とすぐれた文化遺産を有する世界的にも知られた古都奈良を、資本による開発にともなう破壊から守ると共に、住民の文化と生活環境の向上をはかることであった。

先生による審議会の運営は見事なものであった。先生は決して自分の主張を人に押しつけられることはもちろんのこと、強調されるようなことも一度もなかった。しかし参加者の自由な発言の中から次第に方向を確定し、与えられた諸条件を配慮しつつ、現実的で有効な結論にみちびかれる手腕は余人の追隨を許さぬものだったと思う。そのうえ先生の現実的解決策はつねに未来への展望と発展を含むものであった。

先生は敗戦直後、早くもオートメーション時代の到来を予見され、また奈良へ来られて間なく、新しい土木技術にもとづく奈良の住宅開発の急速な進行を予言されたが、それらはのちにすべて現実となって、我々をおどろかしたものであった。

けれども、先生が衆望を荷なわれ、市政にかかわる重要な審議会を円滑に運営されたのは、たんに先生の高邁な識見とすぐれた判断力・予見力によるものだけではなかったと思われる。それはおそらく先生の奈良を愛する情熱と日頃の簡素な生活態度そのものからにじみ出る先生の人柄によるものであったと思う。

先生はかねがね「自由な個人」として、しかも社会的に生きることを信条としておられた。叙職を辞退されたのもそのためであるが、(先生によれば、勲章をもらうことは天皇制国家独占資本主義のエリートとして満足することになるのだそうである)、いく

つかの大学からもってこられた学長就任の要請を、健康上の理由をもって、固辞されたのも、そのためであったと思う。

先生の場合、「自由な個人」の生活態度は、あの登山帽にレインコートと風呂敷包という我々の学生時代以来一貫した先生のすがたが象徴するごとく、無欲にして恬淡たるものであった。そのことは研究材料として使われた蔵書・資料類をすべてそのとき関係していた大学に寄贈されたことにもうかがうことができよう。それでいて先生には常に他人への暖かいおもいやりがあった。

さて話が奈良市にかたよったが、先生が関係されたのは奈良市だけではない。先生が県に関係されるのは京大退官後の昭和42年からであるが、まず県の古都風致審議会の委員に就任されたのをはじめに、県の公害対策審議会の委員、都市計画地方審議会会長、文化財保護審議会会長など、文化と民生にかかわる県の数々の重要な審議会の委員を引受けられ、その夫々において指導的役割を果たされたのである。

ところで、先生と奈良とのかかわりについて、もうひとつ述べるべきでないことがある。それは先生が昭和46年から、奈良商工会議所の商業活動調整協議会（以下商協調と略す）の会長として活躍されたことである。

これははじめ百貨店法によって設置されたもので、中小小売商業を巨大百貨店の無制限進出による打撃から守るためのものであったが、のちに大型スーパーの誕生による影響力が大きくなるにおよんで、昭和48年に新たに大店法（正確には「大規模小売店舗における小売業の事業活動の調整に関する法律」）ができ、それにもとづいて設置されたものである。先生はなくなれるまでこの会長をつとめられた。

人口急増の奈良市はまたすさまじい大型スーパー進出の修羅場となった。昭和54年には大型スーパー7店舗がつぎつぎに市内進出（新規出店5、既存店の増床2）の届出を出し、現在各地でみられるような地元商業界とのはげしい摩擦と混乱が予想された。それは全国的にみても稀にみるケースであったし、それだけに注目を寄せられたものでもあった。私自身もこのときはじめて、先生の要請をうけて委員の一員に加わったのであるが、先生はこの難問題を、比較的短期間に、ものの見事に解決されたのである。

解決に向っての基本方針はすべて先生が考えられたものであった。私共はこの方針にしたがって作業したにすぎない。一步あやまれば、地元商業界に破壊的影響が生じるような事態を回避することができたのは、先生の地域の特性への深い理解と、周到な配慮

のたまものであった。このときの先生の力量のすごさはまさに畏敬に値するものであったと今にしてつくづく思う。所管の通産当局もその処理のあざやかさに驚いたということである。

以来長らく閉店休業であった商協調が、この9月になって、久しぶりに開かれることになり、先生もそれへの出席を楽しみにしておられたのに、その矢先、急になくなってしまわれたのである。

先生は学問・教育のほかにはこれほどの社会的業績をあげながら、遂に一度も、自己の功績について語られたことはなかった。晩年になって、先生が信頼しておられたさる人物がひきおこしたことで大きな被害をうけられたときも、ついに先生の口から一言の愚痴も、その人物についての一言の批判も聞くことはなかった。これらもとうてい余人のまねることができない先生の非凡さを物語るものであろう。

先生がなくなられたとき、そのベッドのかたわらに2冊の真新しい洋書がおかれていた。ひとつは Brian Burkitt の *Radical Political Economy—An Introduction to the Alternative Economics—*, 1984. であり、いまひとつは Walter Wannemacher の *Die Zweite Welt-Wirtschaftskrise*, 1983. であった。そのどちらも先生がごく最近まで読んでおられた形跡が残されていた。

それには昭和50年(1975年)に私がロンドンに留学中、先生が奥様と御一緒の海外旅行の途中に立寄られ、一緒にケンブリッジ見物に出かけた折買われた記念の皮製のシオリがはさんであった。そして私には、これが、先生が学ぶことを指示された最後の文獻のように思われた。

(附記：先生的事蹟については奈良県、奈良市、および奈良商工会議所の協力をえた。関係各位に謝意を表する。)